

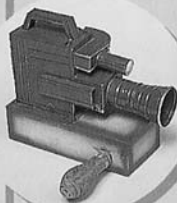
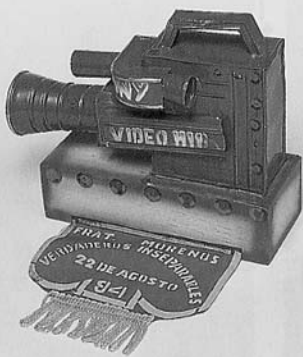
奇妙な楽器—マトラカ—

楽器(標本番号H196376、高さ/17.0cm 幅/20.0cm 奥行/16.0cm)

山本 紀夫 (やまもと のりお)

本館民族文化研究部

ラテンアメリカには奇妙な楽器が少なくない。ちよつと見たところ楽器とはとても思えないものも楽器として利用している。このマトラカもそんな楽器のひとつかもしれない。マトラカは、専門用語では擦奏楽器、一般的には歯車のガラガラ(ラチエツト)として知られているものである。すなわち、歯車状に彫った木の軸を回転させ、それに薄い木片をひっかけてガラガラという音が出るようになっていている楽器である。しかし、これとはもとはキリスト教の教会で使われていたものであり、しかも楽器としてではなく、教会の鐘のかわりの音を出す道具として使われていたらしい。キリスト教ではセマナ・サントとよばれる聖週間の三日間は鐘が鳴らせないので、そのとき鐘のかわりにマトラカ



が使われていたのである。

ところが、現在、ラテンアメリカではこのマトラカを楽器としてさかんに利用するところがある。なかでもボリビアのラパス地方ではマトラカの人気は大変なもので、黒人を模したモレーノという踊りにはマトラカが欠かせない。奇抜なマスクをつけ、派手なマントをまとった人物が数十人、ときには一〇人以上もの多数の人がマトラカを「ガラツ、ガラツ」と鳴らしながら踊るのである。また、このラパスでは、マトラカの歯車部分を箱に入れ、その箱を共鳴体とするだけでなく、箱の上にはしばしば動物や植物、乗り物などをかたどったものを乗せる。写真はソニーのビデオ・カメラを飾りにしたマトラカ。